第３６回
ＭＡＳセミナー

コロナ禍を経て『ウチ（家）を感じる生活と装置』

日時：2023/06/03(土)

講演：14:00～16:00

『ウチ』という言葉には様々なシーンが想像出来るが、いつもその言葉から始まる言葉の内には主体的な側面を感じることができた。その主体的なことが今や平均的な価値観の中で埋没し掛かっていると感じているのは僕だけでは無いだろう。多くの人が理想よりも現実的で平均的な姿を求めているように、僕には観えてきている。家庭という場も今やグローバルな世界のなかにある意味直結していると言える現在だが、同時に足下の個性を現す最もシンプルな『ウチ』としてのイメージが、限りなく希薄になっていないだろうか？そんな平凡で大切な事をこのコロナが収束しつつある中で考えてみたいと思う。今、新しい『ウチ』のシーンがどのように語られるか楽しみであり、いい機会になることを期待したい。
（今井　均）

みんなが集まる樹の下に

（湯本長伯）

住まいの原型は、人の生活を支え囲い覆って造られる内部空間・建築空間です。甲羅の代わりに衣服を纏い、爪や牙の代わりに道具を用いる。究極が家を造ることでした。人体の延長です。

「『うち』は何処にいった」

いま『ウチの家族』は別々に其々の生活を楽しんでいる。離れてはいるが寧ろ精神的な絆は強くなったようだ。僕の同伴者は13歳の猫だけだがそれ以外に生き物ではないが『ウチ』には長いこと愛用の椅子が同居し、古い雑誌や本、棄てられない様々な模型に取り囲まれた生活がある。最近、鎌倉の古道具屋でみつけた木と鋳物で出来た小さなベンチは『ウチの庭』におあつらえむきのものだった。考えてみればこれらの趣向は幼少期に其の基礎的なものが育ったと思う。『幼少期のウチ』を中心とした生活が発展して数十年後の今がある事は確かな事らしい。

今井　均

「歴史的な転換期が来た」

日本人の多くは戦争に駆り出され、それが失われた後は会社第一となり、家族、心から休まる住い、周りの地域への想い、を見限ってきた。このコロナ禍で「ウチ（内側）に気づいた」ことは歴史的な転換期となる。建築家にとっても「ウチ（家）」は「ウチ（内面）」に通じ、感慨を深めている。
重要なことは、このことが一人一人の主体性意識への応援になるだろうということであり、「自己認識のトリデ（砦）」を自覚させていることである。

大倉冨美雄

「HouseとHome」

「HouseとHomeは違うんだよ。自分なりに考えてご覧なさい。」
と、言って居られたのは、藝大の恩師であった清家清先生だった。
Houseは物理的に風雨から身を守る”家”だとすると、Homeはそれぞれの人の心象風景の中に佇む”家”とでも言えるでしょうか。
自分にとってのHomeとは、何だろうか・・・この設計図面では描けそうもない”家”に付いて、今回は考えて見たいと思う。

武田有左

「home sweet home」

「やっぱり家が一番だ」と感じる事はなんて幸せなんだろう。愛する家がある、愛する人が居る、そんな空間があるからこそ、人は仕事や学校で日々戦っている。
そんな日常がコロナ禍により一変してしまった。在宅勤務やオンライン授業で家が戦場と化してしまった。
仕事とプライベートの境界線は曖昧となり部屋の奪い合いまで起きてしまう。一体「home sweet home」はどこへ行ってしまったのだろうか。

森下 真

「これからのうち（家）に大切なこと」

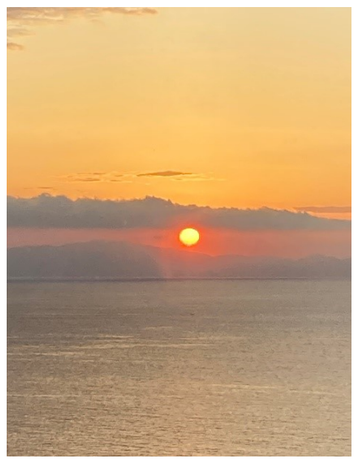
一人暮らしの自分にとって「家」は猫を愛でたり、料理をしたりして、ほっとできる場所であり、仕事場とは一線を引くことが良い、としてきた。コロナ禍を経た今、「家」が帰るための個人的な場所というだけでなく、もっと主体的に生きるための装置として再考される可能性を考えている。地域や家族の関係、高齢化の問題など、現代に山積する住まいの問題、人間にとって大切なことをウチ（家）のかたちを通して考えたい。

田口知子

ウチの価値」はどこへ

「ウチ」の主体性が実在空間から非空間へ変化している。昭和世代は「ウチは家庭」でその場に安堵したが、今は「ネットと繋がるとき」に安堵する若者がいる。家庭が団欒を放棄し「単なるねぐら」となった。子供を受けとめる親も少なく、共働きで住居・教育資金に奔走する現実。その結果、家庭は「ウチ」の存在価値を失い、個々はネットに安堵する価値を見出したのでは？「ひとりでも寂しくない」と感じる世代はどこに行くのか。

宮田多津夫



ウチを楽しむ、マチを楽しむ　・

コロナ禍を経て、ウチ（家）で気持ち良く過ごす改善を色々やってみた。良かったのは、ベランダに日除け（装置）を付けたこと、既製品のパラソルなのだが、半分サイズで上手く納まった。お散歩も習慣づいた。家のたたづまいが色々楽しめる。「これはヒドイ、どうにかならないかなあ」「ウン、これイイ」など学びがある。やはり、ウチとマチとの関係性が大切なんだ！とうなずく。

連健夫

ソトとウチの曖昧で素敵な世界

日本の建築には深い軒下に曖昧な領域があった。そこは庭の一部でもあり、縁側に座れば部屋の連続となるソトにもウチにもなれる素敵な居場所だった。十分な場所がとれない集密な京都の町屋では、坪庭やとおりにわで小さな自然を取り組む工夫で小宇宙のような室礼もつくられてきた。今、ウイズコロナの時代こそ、先人の工夫にもう一度目を向けて、ストレスフリーの居場所創りを真剣に考えていきたい。

村上晶子